

週報巻頭言

「何を見るか」

旧約聖書の列王記下・第一章を開くとイスラエルの王アハズヤ王が登場します。彼は屋上の部屋の欄干から落ちました。屋上の柵が腐っていたのでしょうか。このことから病気になりました。誰でも心細くなります。王は使者を送り出します。どこへか。「エクロンの神バアル・ゼブブのところへ行き、この病気が治るかどうか尋ねよ」と命じました。

かなり昔から一般にユダヤでは、バアル・ゼブブの神へ病気という悪霊を追い出してもらうという信仰があったようです。エクロンはペリシテの最北の町です。病気を治すということでは、遠くの異教の神にも頼るのです。

旧約聖書に記されているように、病気となれば、どこの神にもお願いするという風習があったようです。イエスの時代もこの風習が続いていました。

イスラエルの民は「ヤハウエ」という天地万物創造の神を信仰していたはずですが、この信仰の神に祈り、願うのではなく病気となると異教の神々にも願うのです。

このような背景から「ファリサイ派の人々は悪霊の頭ベルゼブルの力」とイエスの働きを決めつけたのです。(山下誠也)